

70 歳台健康老人の住み方の特性  
老齡期の住宅に関する研究 (その 3)

正会員 ○林 玉子\*1 正会員 児玉 桂子\*2  
正会員 在塚 礼子\*3

1. 調査目的と方法 本調査は当研究所のプロジェクト研究「地域老人の老化と背景」の一環として、障害特性に対比して、加齢による老化特性と住み方の対応関係を明らかにする目的で行われた。対象者は日常生活に支障がないが、生理学的にも、社会的にも、一つの大きな転換期にあたる70才老人を対象とした。同群の身体条件と社会的条件については、上記研究として、70才と75才の両時点で詳しい縦断面調査が行なわれているので、我々は主に物的条件に絞って住宅と家族条件から住み方の概要を先ずアンケート調査で把握し78.8%の計147名の回答を得た。その内78名について、住宅の平面図、老人室の詳細図、および家族も含めた住み方、居住歴、住居歴などの訪問聞き取り調査を昭和53年3月～4月の間に行った。我々が把握した住み方調査の資料とプロジェクト研究で得た身体条件、社会条件に関する資料を比較検討すると、住み方の変化に及ぼすこの三大要因の対応関係がより明らかに捉えられ、又今後の追跡調査を重ねることにより、老化特性から障害特性への移行の段階的特徴、差異を見いだすことができる。

本報告では、前編との関連より、主に訪問調査を中心に  
① 家族と住み方 ② 老人室の住み方 ③ 身体機能の低下と住み方について報告するが、その他詳細は今年度中に報告書としてまとめる予定である。

2. 対象者の概要 対象者は東京都K市に居住する71才～73才の健康老人であり、男性52名(内46名は有配偶者)、と女性26名(内12名は有配偶者)計78名である。高学歴者が多く79%は本人(又は配偶者)名義の持家であり、ほとんどのが戦後本人の代で新築し、家族構成の変化に伴って増改築をされている例が多い。家族人数当りの部屋数が一室以上が85%も占める住居条件の高年齢者であり、住み方に対する住条件の制約が小さいことが大きな特徴である。

3. 結果と考察 1) 家族と住み方: 2世代家族が同一敷地内に住む場合、同別居を規定する指標の一つに住空間・設備の共用・専用の度合と住宅の建て方がある。本調査では表-2に見る如く21の居住タイプに整理分類した。C4、C5タイプでは、将来内部より通じられるよう開口部又は通路をつける、又は現在非常連絡用のインターホンを付けているなど、物的条件の介助により、別居タイプでも、同居家族に近い依存傾向が見られた。反面C3タイプでも家族関係が悪い、

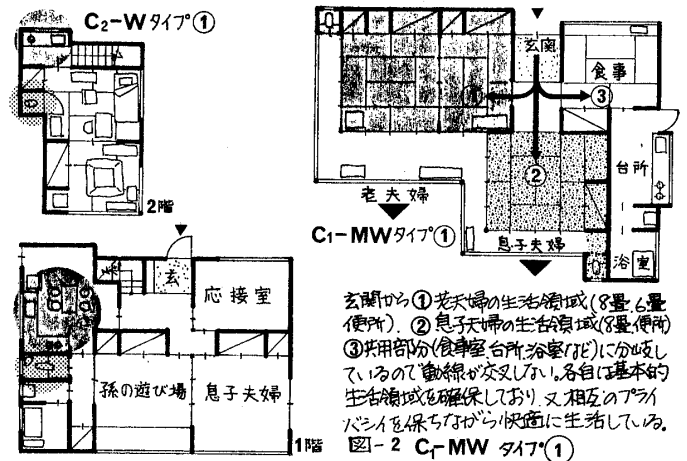
	複合家族		単純家族		独立家族		計	
	夫婦	単身	夫婦	単身	夫婦	単身	夫婦	単身
男	31(17)	3(3)	34(20)	18(10)	2(1)	20(11)	31(19)	1(1)
女	13(8)	25(10)	38(18)	5(2)	3(2)	8(4)	6(2)	10(3)
計	44(25)	28(13)	72(38)	23(12)	5(3)	28(15)	37(21)	11(4)
							48(25)	104(58)
								44(20)
								148(78)

( ) は、その内訪問調査した数。

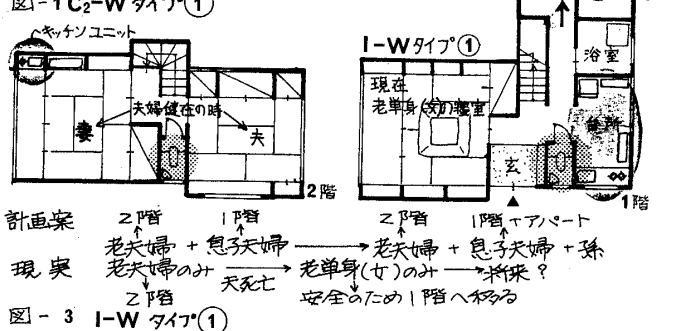
表-1. 調査対象者

住居タイプ	住居タイプ	住居タイプ	住居タイプ	性別		計	備考
				男	女		
複合家族	同一棟内同居	老夫婦	C1-MW	5	5	10	老人室のみ専用
		老単身(男)	C1-M	3			
		老単身(女)	C1-W		7	10	
合 家	上下階分離同居	老夫婦	C2-MW	3	1	4	老人室の他に専用台所あり
		老単身(女)	C2-W		2	2	
	連棟同居(内通じなし)	老夫婦	C3-MW	2	1	3	玄關、浴室台所が専用
		老単身(女)	C4-MW	4		4	共用部分なし
別棟別居	別棟別居	老夫婦	C5-MW	3	1	4	共用部分なし
		老単身(女)	C5-W		1	1	2世帯が老夫婦
		小 計			20	18	38
単純家族	未婚子と老夫婦	S-MW	10	2	12		
	未婚子と老単身(男)	S-M	1		3		
	未婚子と老単身(女)	S-W		2	2		
	小 計		11	4	15		
独立家族	老夫婦のみ	I-MW	19	2	21	70才で配偶者喪失 2名	
		I-M	1		4	同居希望者 32%	
		I-W		3	4	未回答者 32%	
	小 計		20	5	25	子供なし 12% ずと別居 28%	
	合 計		51	27	78		

表-2 家族構成別居住タイプ



玄關から①老夫婦の生活領域(8畳、量便所)、②息子夫婦の生活領域(8畳便所)③共用部分(食事室台所浴室等)に区分けしているため動線が交差し、各自に基本的な生活領域を確保しており、又相互のプライバシーを保持しながら快適に生活している。



生計は完全に独立しており三食自炊だが昼間は孫とよくつじんを一緒に食べる。又一階の息子夫婦の部屋には非常ベルが通じ相互のプライバシーを保持しながら心理的に依存している。

計画案 2階 1階  
老夫婦 + 息子夫婦 → 老夫婦 + 息子夫婦 + 孫  
現実 2階 1階  
老夫婦のみ 天死 → 老単身(女)のみ → 将来?  
安全のため1階へ移る

場合、住宅内列通じる扉があっても、施錠して、相互交流をしない例もあり、心理レベルにおける同別居意識も今後追求する必要がある。図-1 図-2に、同一平面、又は上下階別に両世代の生活領域の分離が確保された例を示しているが、C<sub>2</sub>-W-①タイプでは本人は膝が痛むなど階段の昇降が不便であり、将来2階での自立生活に不便をきたすことは予測できる。当群の家族構成の変化は、C<sub>1</sub>-MW → C<sub>1</sub>-W、I-MW → I-Wと先述配偶者の喪失に次いで身体条件の低下による同居形態への移行である。図-3は同居志向のI-Wタイプの例であるが、この様に物的条件が整っても息子家族は仕事の都合上同居できず、71才で夫が死亡したが本人は元気が間はずと1人暮らしをしたいと決めている。本調査には物的条件が具備した同居志向のタイプが多いことも特徴である。台所は2世代家族で、一番共用したくない設備の一つに上げられているが、自主的に生活ができるC<sub>3</sub>~C<sub>5</sub>タイプでは台所で3食つくっているのに対して、C<sub>2</sub>タイプになると6例中4例が既に使っていない。特に小型台所では湯を沸かす、好きなものをつくるなど副次的な使い方をしている。

4. 老人室の住み方特性：①就寝形態(表-3)：ベッド使用者は全体の16.6%で、夫婦で2室分離就寝をしているものは夫婦群内で24.5%と高率である。図-4~図-7に各種就寝形態の実例を示している。14組の2室分離就寝の内7例が2室和洋タイプであり、ベッド使用は全員男性であった。理由として、生活リズムのずれ、趣味の違いなどの他に、ふとんの上げ下げが次第、昼寝に便利、と身体条件の低下によることにも注目を要する。②寝室内での日常行為：日常行われている行為を表-4に見るA~Eの5段階に分けて見た結果、昼夜の就寝のみが28.9%で、Eの食事を含む複合行為を行つたのは17.9%と住条件が良いにもかかわらず老人室内での行為の複合化の一端が見られる。広さと行為を見ると4.5帖では1人就寝と本人の行為のみであるが8帖からは2人就寝が多くなり、広さと行為の対応が見られた。

5. 身体条件の低下：便所の問題として、1位が自室から離れている、2位が寒い、3位が狭いとなっている。図-7に見る如く多くの老人室は東南の良い方向に位置しているため、西北側の便所と遠くなる。そのために夜間ポータブル便器などを使用しているものがすでに4名ある。尚63%のものが腰掛式便器を使用している。まとめ：日常生活に支障がない70超老人の住生活も身体条件の低下と関連して、ふとんからベッドへ、和式便所から腰掛け式へ、2階から1階へなどの物的条件の変化が見られた。老化特性と障害特性は連続的であり、自立生活のできる時期

\*1 東京都老人総合研究所 障害研究室室長 \*2 同研究員 \*3 埼玉大学教育学部講師

の比較的独立性の高い住宅を良しとする段階から機能の低下した時期にやに容易に家族援助型に変えられるか、その成立条件を追求していくのが今後の研究課題である。

		家族構成				老人室の広さ(m <sup>2</sup> )					
		複合	単独	独立	計	4.5	6.0	7.0	8.0	10.0	計
天室	西和	18	8	11	37	0	22	1	13	1	37
	西洋	1	0	2	3	0	1	0	2	0	3
	和洋	2	0	2	4	1	2	0	1	0	4
	小計	21	8	15	44	1	25	1	16	1	44
婦室	西和	1	2	2	5	3	6	0	1	0	10
	和洋	3	2	4	9	6	10	1	1	0	18
	小計	4	4	6	14	9	16	1	2	0	28
单身室	和	11	3	3	17	1	12	0	4	0	17
	洋	2	0	1	3	1	1	0	1	0	3
	小計	13	3	4	20	2	13	0	5	0	20
合計		38	15	25	78	12	54	2	23	1	92

註：和：和式寝具(とん)、洋：洋式寝具(ベッド)  
\*1: 2室就寝は、2室として集計した。

表-3 家族構成別老人室の就寝形態と広さ

	配偶者の有無		老人室の広さ(m <sup>2</sup> )					計	凡例
	夫婦	単身	4.5	6.0	7.0	8.0	10.0		
A	12 (20.7)	2 (10.0)	1	7	0	6	0	14	17.9
B	8 (13.8)	0 (0)	1	4	1	2	0	8	10.3
C	13 (22.4)	9 (45.0)	4	12	0	6	0	22	28.2
D	15 (25.9)	5 (25.0)	1	12	1	6	0	20	25.6
E	10 (17.2)	4 (20.0)	0	10	0	3	1	14	17.9
計	59 100%	19 100%	7	45	2	23	1	78	100%

凡例 A: 就寝のみ C: 上記Bとテレビ、読書、針仕事 D: 上記Cと接書、団らん E: 上記Dと食事

表-4 配偶者の有無別老人室内の行為と広さ

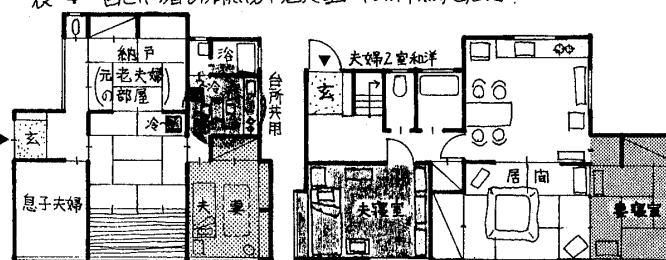


図-4 C<sub>1</sub>-MW 夫が寝たきりとなり同居との関係が悪化(最一室で多機能的に生活している。台所は冷蔵庫を別に以て時間をずらして使用している。生活領域の狭小化と家族条件の悪化で住条件は同居的であるが準同居形式として方が良い例である。)  
図-5 S-MW 夫は外交的で自由を愛し妻は和室が好きだという2人。夫はベッド、妻はふとんで就寝している。

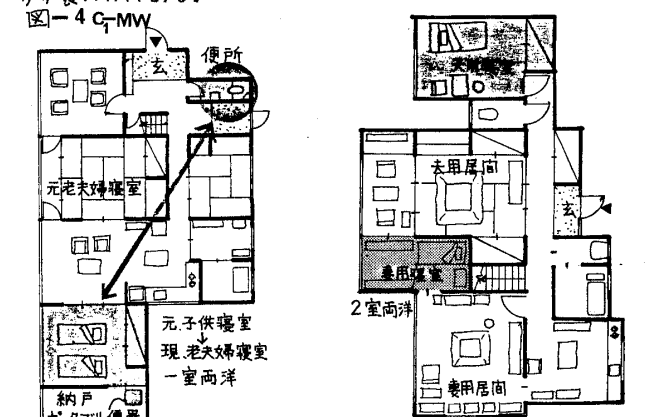


図-6 C<sub>5</sub>-MW 夫は自立性が強(身の回りの事はすべて自分でする。ふとんの上げ下げが苦になるのでベッド就寝を食事必要とは別に食堂で取る。妻は自分の寝室と居間を持つている。)  
図-7 C<sub>5</sub>-MW 子供が巣立った後の東南の良い部屋を夫夫婦用に選択して使用(実例が多い。そのため北面にある便所が遠く(別)納戸内にポータブル便器を設けている。)